

鐘楼跡

土の基壇と礎石は、1226年の火災で焼失した毛越寺の本堂（金堂円隆寺）の鐘楼の痕跡として残っているもののすべてです。

鐘楼は、日本中の仏教寺院の共通の特徴です。本堂には2本の廊下がシンメトリーをなして南にある池のほうに向かって伸びていました。その廊下の終わりには、東側に鐘楼が、そして西には経堂が建っていました。この2つの建物は建築的にはお互いに似通っていて、寺の景観に調和のとれた統一感のある印象を与えていました。鐘は、儀式を行う際や、祈祷への呼び出し、あるいは一日のうちの特別な時刻を告げるために、僧侶が鳴らすのが伝統です。毛越寺の僧侶も、そのような場合に鐘を鳴らしていたのでしょう。